『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(七)

植木久行

●一八六番　元稹「夜坐す」「螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長」

○元和十年(八一五)六月(晩夏)、作者三七歳、通州(四川省達縣)での作(花房・前川『元稹研究』「作品綜合表」、卞『元稹年譜』)。通州司馬在任。司馬(州の次官)は、中唐以降、職務權限のない貶官ポスト。明の曹學佺『蜀中名勝記』巻二三、夔州府達州(唐の通州)の條には、「州は元微之、司馬に左遷せられしを以て名を著す」という。

元和十年正月、元稹は都長安に召還されることになり、(1)江陵(湖北省)での五年閏の左遷生活(江陵府士曹參軍在任)(2)に別れをつげた。正月の下旬ごろ、都長安に到着し、靖安坊の舊宅に入り、白居易らと再會して交遊する。その喜びもつかの間、三月十五日、通州司馬となり、同二十九日、都長安を離れた。元稹の「酬樂天東南行一百韻」詩(『元稹集』巻12)の自注に、「元和十年閏六月、通州に至る」とある。しかし、元和十年には閏月はない(平岡『唐代の暦』など)。閏の字は衍字か、作者の記憶違いであろう。本條の上句によれば、本詩は通州に到着直後の六月中の作。

元稹は着任後、しばらく通川縣(通州の治所)の驛館(驛舍)に住み續けた。本詩はその驛館—本詩第三句の「空館」—での作。この空館は、『元稹集』(巻20)のなかで本詩の直前に置かれた「見樂天詩」詩の「江館」に相當する。白居易の「微之、通州に到りし日、館を授けられて未だ安んぜず。…」詩(巻15)にも、「雨は淋ぐ　江館　破墻の頭りに」と見える。白詩の江館に對して、佐久注は「江邊の官舍。通州司馬の館を指す」と説明し、岡村繁『白氏文集三』(竹村則行執筆)も全

く同じである。しかしこの館は、「首都から四方にのびる幹線道路に面しては三十里ごとに驛を置き、支線や僻遠の地には館を置いた」（小野勝年『入唐求法巡禮行記の研究』第四巻四三一頁）、その「館」[3]を意味しよう。杜佑『通典』巻三三、郷官の條に「三十里に一驛を置く」とあり、原注に「其の通途・大路に非ざれば、則ち館と曰ふ」とある。つまり、唐代の驛傳制度にもとづいて設置された驛館[4]を指す。岑參の「銀山磧西館」「涼州館中與諸判官夜集」詩などに見える館も同例であろう。青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』第一篇第三に、「宿泊飲食の設備を有し、知館人が居て掌ったが、驛の如き驛馬・驛子の設備はなく、專ら宿屋の任務を果した」と説明する（五九頁）。

ちなみに、本詩の作られた通州通川縣の江館は、丁溪館とも呼ばれたらしい。嚴耕望『唐代交通圖考』第四巻（一一七一頁）には、元稹の「通州丁溪館夜別李景信三首」其二を主な論據として、前掲の元・白詩の江館を「蓋し卽ち丁溪館と名づくるか？　按ずるに、通州は今の達縣、渠江に濱臨むなり」という（圖十四も參照）。

通州は、住む人も稀な山あいの邊鄙な地で、まるで甑の中にいるような蒸し暑さであった。毒蛇や虎が道をさえぎり、夕方になると蚊や蟆が群れをなして襲う。風土病（瘴疫）が蔓延して死ぬ者が多く、夏には日照り、秋には長雨が續く「海内　悒惶の地（たえず生命の不安をおぼえる悲慘な土地）」であった。言葉も通じがたく、元稹の詩[6]に「衙に入る官吏　聲は鳥かと疑ふ」という。

元稹は着任早々、瘧病（マラリアの類）を患い、やせ細って重態に陷った。元稹の有名な「聞樂天授江州司馬」詩は、約二か月後の秋八月、通州の地で危篤狀態に陷っていたときの作である。ちなみに、詩題の「夜坐」は、憂愁などのために寢つけぬ狀況を示唆する[7]。白居易の「夜坐す」詩（巻14）にも、「時に感じて　因りて事を憶ひ、寢ねられずして鷄明に到る」とある。

○〔螢火〕ホタルの名（『爾雅』釋蟲、晉の崔豹『古今注』魚蟲など）。『詩經』豳風「東山」の孔疏（『毛詩正義』巻八）に、「螢火は卽ち夜飛んで光有る蟲なり」と見え、『藝文類聚』巻九七、螢火の條に引く『續晉陽秋』にも、いわゆる車胤聚螢の故事を引いて、「夏日、練囊を用て數十の螢火を盛る」という[8]。川口譯に「螢のとぼす火」、大曾根譯に「螢の火」とあるが、二字でホタルそのものを指す用例である。元稹「秋相望」詩の「蠨蛸（アシナガグモ）低戶網、螢火度牆陰」や、「景

申秋八首」其二の「簾斷螢火入、窗明蝙蝠（コウモリ）飛」なども同例。螢の亂舞は、秋が近づき、しだいに夜長を感じさせる季節の、しみじみとした哀感を表す。西晉の傅咸「螢火賦」の序にも、「余曾獨處、夜不能寐、顧見螢火、遂有感。…」とあり、「夜は耿耿として寐ねられず、憂ひは悄悄として情を傷ましむ。……　詩人の悠一作懷に感じ、熠燿を前庭に覽る」という。螢の季節感等については、一八二番參照。

○〔辰星…〕　上句と同樣に、盛夏がすぎて初秋が近づいたことを歌う。從來、「辰星」の解釋は、「古來難義也」（『江談抄』卷四）と評され、近年なお「水星」（柿村『考證』や大曾根注など）、「北斗星」（川口注）などと譯されている。しかし、この辰星は、夏の代表的な星座の一つ、蝎座のなかの、ひときわ紅く光る一等星「アンタレス」（和名ナカゴボシ）[9]、漢語では火・大火、または心宿（二十八宿の一）などと呼ばれる星を指している。『爾雅』釋天に「大火、これを大辰と謂ふ」とあり、郭璞の注に「大火は心なり」という。また『左傳』昭公元年の條に「（后帝は）閼伯を商丘に遷し、辰を主らしむ」とあり、杜預の注に「商丘は宋の地、辰星を祀るを主る。辰は大火なり」という。

辰星を歌う著名な用例は、『詩經』豳風「七月」の「七月流火」である。毛傳に「火は大火なり。流は下るなり」とあり、鄭箋に「大火とは寒暑の候なり。火の星中（南中、季節ごとにある星宿が眞南に見えること）して、寒暑退く[10]。故に將に寒を言はんとして、先づ火の所在を著す」と說明する。つまり、「七月　火流る」とは、夏の南の夕空に高く輝いていた大きな紅い星―大火の位置が、初秋の七月になると、西の空の低いところに移動し、氣候がしだいに涼しくなることをいう[11]。いいかえれば、南の空に高く輝いていた「大火」が、黃昏どきに西の地平線近くに低く見える天象の變化に、初秋の訪れを察知したわけである（仲秋八月の黃昏時には、すでに見えない）。新城新藏著『こよみと天文』[12]「一一　天の龍」の條には、

大火といふのは、夏の夕方に南中する赤色の一等星で、今日の名稱は、さそり座アルファ（一つの星座のなかで最も代表的な明るい星）と稱するものである。目立つて赤いので、火又は大火と稱へられ、それが日沒直後に南中するのを以て夏の眞中、五月の標準として居つたものである[13]。此星は長き殷の時代を通じて標準の辰（季節を判定する基準となる星、時節を示す星座）として用ひられて居つたがために、遂に辰の名を獨占し、辰といへば直ちに大火を指す程

になつたものと見える。

と説明し、さらに「大火は五月夕方に南中する星なので、春分頃から見え始め、秋分には太陽に近づいて見えなくなる」[14]と指摘する。

従來、この大火説に近いものとしては、『抄注』の「或人云、辰星ハ主夏之星也。仍、秋ハ早隱也」をあげることができよう。また、若干誤解を含みながらも、『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』の説――「晩夏ノ心也。辰星ハ、廿八宿ノ中ニ、房宿ト尾宿ト心宿トノ三ノ星[15]也ト云ヘリ。彼ノ星ハ、夏ノ末ニ早ク沒テ、秋無キ星ナレハ、夜初長ト云ル也」も、參考になる。『中國文學歳時記　秋(上)』[16]「秋の夜」(近藤光男執筆)の條には、本句をも採りあげて、次のごとくいう、

「七月流火」、初秋七月の黄昏時に大火が西空低く輝く、

というのは『詩經』人の見た天象で、歳差[17]のため唐の詩人たちがそれを見たのは、ひと月近くも遅れて舊暦八月の黄昏であった。「辰星早く沒して夜初めて長し」(元稹「夜坐」、『和漢朗詠集』螢)、この辰星は大火である。

この指摘は、古來の難義をみごとに解決したものとして高く評價できる。ただ本句は、歳差にともなう唐代の實際の天象を直接歌うものではなく、『詩經』豳風「七月」の詩を踏まえた古典的な表現、と考えるべきであろう。

西空低く輝く大火によって秋の到來を知る、という發想は、六朝以降散見する。西晉の潘岳「秋興の賦」(『文選』巻13)には「流火の餘景を望む」とあり、唐の李周翰は、「流火は心星なり。秋には心星　西に下りて將に沒せんとす。故に餘景有るなり」と注する。このほか、

火逝首秋節　新明弦月夕(謝靈運「七夕詠牛女」)
玆辰戒流火　商飆早已驚(陳の周弘讓「立秋」)
歳落衆芳歇　時當大火流(李白「太原早秋」)
當君相思夜　火落金風高(李白「酬張卿夜宿南陵見贈」)
山雲行絶塞　大火復西流(杜甫「立秋雨、院中有作」)
夜涼金氣應　天靜火星流(劉禹錫「新秋對月寄樂天」)
大火收殘暑　清光漸惹襟(韋莊「同舊韻」)

などがあり(商飆・金風は秋風、金氣は秋氣)、いずれも秋の訪れと關連づけた表現である。

ところで、明の楊循吉の影宋抄本を底本とした冀勤點校『元稹集』巻二十には、「辰星」を「星辰」に作り(校語はない)、明の張之象撰『唐詩類苑』巻十六、歳時部・夜の條にも「星辰」に作る(『全唐詩』巻四一五も同じ)。また四部叢刊本に附す張元濟「元氏長慶集校文」にも、この言葉に關する

校記はない。これはおそらく、過去の中國でも「辰星」の意味を把捉しかね、頻見する熟語「星辰」（星の通稱）の誤りと考えて二字を轉倒させたものであろう。しかし「星辰早く沒して」では、秋の到來をつげる「夜初めて長し」の語へと文脈的に續きにくい。『千載佳句』四時部・晩夏にも、本條と同樣に「辰星」に作っている。「辰星」の二字こそ、唐代の『元氏長慶集』の原形である、と判斷されよう。

○〔早沒〕「早」は早くも、すでに、とっくに、などの意。張相『詩詞曲語辭匯釋』卷二「早是㈠」の條に、「早猶本也、已也」とある。「沒」は、沈みかくれる意。蘇武の作とされる「詩四首」其三（『文選』卷29）に、「參辰皆已沒、去去從此行」とある。秋が近づくにつれて、大火は西の空低く垂れるようになる。このため、眠れぬままに夜がしだいにふけ、辰星は早々と沈んで見えなくなるわけであろう。

○〔夜初長〕「初」は、ものごとの發端に溯って述べる副詞。「折しもようやく…しはじめたばかり」の意。一三七番に前出。

●一八七番　許渾「常州にて楊給事に留與す」「蒹葭水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋」

○本詩は、『全唐詩逸』卷上に收める逸句。『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』によれば、七言律詩の腰句（頸聯）にあたり、「秋ノ興ヲ述タル」作。詩題は、ひとまず『全唐詩逸』や『私注』に據るが、前田侯爵家所藏二條爲氏筆本などには「常州留上楊給事」に作り（『校異和漢朗詠集』）、『六注』には「常州留止楊給事」に作る。「留止」は「留上」の形訛か。ちなみに、『千載佳句』四時部・秋興の條には「上陽給事」に作るが、陽は楊の形訛である。

常州は、今の江蘇省常州市付近。許渾が後期住んだ潤州の地と蘇州のほぼ中間に位置し、江南運河の開通とともに經濟的に發展した南北交通の要衝。薛迪成「常州歷史地理」[18]や、潘鏞『隋唐時期的運河和漕運』[19]一一三頁以下參照。

○〔楊給事〕給事とは官名。中書省で作成された詔勅の草案や、諸司が皇帝に上奏して裁可を仰ぐ奏抄の類を逐一檢討し、不適切なところがあれば訂正して差し戻すこと（封駁）を掌る審議機關―門下省の重職「給事中」（正五品上）をいう。楊給事とは、吳汝煜主編『唐五代人交往詩索引』[20]八六頁にも指摘されるように、大和七年（八三三）三月、給事中から常州刺史へと轉出した楊虞卿（字師皐）を指す。楊虞卿といえば、熾烈な牛李の黨爭のなかで、牛黨の實力者（黨魁）とし

て大きな権勢を振った人物である。李宗閔から骨肉のごとき深い信任をかち得、人事を意のままに操り、利財を貪ったという。『資治通鑑』巻二四四、大和七年二月の條には、牛黨の威勢を次のごとく記す。

時に給事中楊虞卿は、従兄の中書舎人汝士、（楊虞卿の）弟の戸部郎中漢公、中書舎人張元夫、給事中蕭澣らと善く交結し、權要に依附して、上は執政を干し、下は有司を撓し、士人の爲に官及び科第を求むること、志の如くならざる無し。

大和七年二月、李德裕が牛僧孺に代って宰相になると、文宗の意志と輿論を背景に朝政の刷新がはかられ、牛黨の幹部たちは次々と放逐された。楊虞卿も同年三月、給事中から常州刺史に出された。翌大和八年十月、李宗閔が宰相に返り咲き、李德裕が轉出すると、楊虞卿は同年十二月、呼びもどされて工部侍郎となる。[21] 本詩は、楊虞卿の常州刺史在任[22]中の、大和七～八年の秋の作。當時、近鄰の蘇州刺史であった劉禹錫も、「寄毗陵（常州の郡名）楊給事三首」や、「和浙西王尚書聞常州楊給事製新樓因寄之作」詩を作っている。[23] ちなみに白居易の妻は、この楊虞卿の從父妹にあたり、「送楊八給事赴常州」詩（巻31、後集巻12）も殘る。

許渾は大和六年（八三二）、ようやく念願の進士科に及第した。[24] しかし、すぐには釋褐（任官）できず、潤州丹陽縣に住みながら、[25] 盛んに求職活動を行っていた。楊虞卿は、「（官界での）升沈は牙頰の間に在り」、[26]「升沈取捨は其の唇吻より出づ」[27]などと評された、人事權を掌握する實力者であった。[28] 本詩はおそらく、彼のほどない歸京を見越して、あらかじめ自己の窮狀を訴えて、その推擧を請う意圖をもつ。譚優學「許渾行年考」[29] 大和七年の條には、「許渾作縣尉、疑自是年始」というが、從いがたい。

○〔留與〕『集註』に「此の詩を與へて別るゝ心なり」とあるように、旅立つ人が見送り人に對して、別れを前に詩を殘す「留別」[30]とほぼ同意。從って、常州を立ち去る許渾が、楊給事に離別詩を與えて別れる場面が想定される。留與の與は、與える、贈る意。[31] 杜甫の「奉留贈集賢院崔于二學士」や、李商隱の「留贈畏之」詩などの留贈と同意であろう。ちなみに、異文の「留上」は、盧綸の「將赴京、留獻令公」詩の用例と近い。

○〔蒹葭〕 オギやアシの類。許渾の「贈蕭兵曹先輩」詩に「潮は水國（一作郭）に生じて蒹葭響く」と歌われるように、蒹葭は楊柳とともに江南の水郷地帶を彩る植物。江南運河ぞいの風

景を詠んだ顔眞卿の「登平望橋下作」詩にも、一面の葦原を「海に際る蒹葭の色、終朝　鳧雁の聲」という。許渾の詩には、蒹葭と楊柳を對にする表現が「甚だ多し」と評される（南宋の葛立方『韻語陽秋』巻一）。「日照蒹葭明楚塞、煙分楊柳見隋堤」（「送上元王明府赴任」）や、「楊柳北歸路、蒹葭南渡舟」（「泊松江渡」）などとともに、本條もその代表的な用例である。(32)

ちなみに、蒹葭と楊柳の二語は、ともに人を思慕し、別離を傷む語感を漂わせる。『詩經』秦風「蒹葭」に、「蒹葭蒼蒼として、白露　霜と爲る。所謂伊の人（いとしいあの人）、水の一方に在り」云々という。また楊柳は、『詩經』小雅「采薇」（楊柳依依）や折楊柳の習慣との關連で、別離の悲哀を誘うことが多い。

○〔水暗〕　許渾の「經故丁補闕郊居」詩にも、「風吹藥蔓迷樵徑、雨一作水暗蘆花失釣船」とある。なお『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』には、「水邊ノ茂リ盛ナル葦原ハ暗シテ、螢火ノ影見ユル故ニ、知レ夜云リ」と解釋する。本詩も「許渾千首濕ふ」の一例。一七七・一八二番と本稿の補注參照。

○〔楊柳〕　ヤナギの総稱。川口・大曾根注に「かわやなぎとしだりやなぎ」とするが、「楊柳ト連言シテ、タダヤナギト云フコトニナル也」（伊藤東涯『操觚字訣』巻10）。

○〔風高〕　秋風を意味する言葉、商風・素風・凄風・涼風などの一つに「高風」があり、(33)晩秋ごろ空高く吹きつのる烈風をいうことが多い。西晉の張協「七命八首」其二に「高風送秋」（『文選』巻35）とあり、李善注に引く後漢の李尤撰「七歎一作款」に「季秋（九月）の末際、高風猋厲たり」という。また、この二字を轉倒させた「風高（風高し）」の語も、六朝以來用いられた。(34)許渾の詩中には、ほかに「客散山公醉、風高月滿城」（「陪王尚書泛舟蓮池」）や、「露重螢依草、風高蝶委蘭」（「晨至南亭、呈裴明府」）などがある（いずれも秋の詩）。清の許培榮『丁卯集箋註』巻三には、後者の下句を「風甚だ烈しくして蝶飛ばず」と注する。

○〔雁送秋〕　『集註』に「雁來つて秋を知らせたる心也」とある。白居易詩（「宴散」巻25、後集巻8）の「新秋　雁帶び來る」と類似した發想である。金子・江見『新釋』によれば、『增補詩句題解彙編』巻十九には、「雁報秋」に作るという。報は告げる意。この異文は、李賀の「蘆洲の客雁　春を報じ來る」（「梁臺古意」）を連想させる。

●一九二番　白居易「驪宮高し」（「新樂府五十首」其二十一）「遲遲兮春日、玉甃暖兮溫泉溢。嫋嫋兮秋風、山蟬鳴兮宮樹

紅」

○元和四年（八〇九）、作者三八歳、都長安での作（花房・朱・王・羅）、翰林學士[35]・左拾遺在任。「新樂府五十首」の作成年代に關しては、白居易自らその大序に「唐元和四年、左拾遺白居易作」（神田本）と記すが、その一部には本年以後の作成や改定を含むともいう[36]。本詩に限定していえば、詩中の「吾が君　位に在ること已に五載」に對して、鈴木虎雄『白樂天詩解[37]』は、「憲宗元和五年に至りて在位五年なり」と述べ、高木正一『白居易』上も、ほぼ同じ立場である。しかし、陳寅恪がすでに『元白詩箋證稿』第五章で指摘するごとく、憲宗は永貞元年八月に卽位しており、元和四年の時點で「已に五載」となり、全く問題はない。

本詩は周知のごとく、親友の李紳「樂府新題」と元稹「新題樂府」の作成を承け、それを擴大して整然と體系づけた諷諭詩の名作「新樂府五十首」中の一首である。『詩經』（漢代詩經學）の〝美刺比興〟の理念を重視した「詩道」の復活を提唱し、現實社會の不合理や矛盾を變革しようとする熱意にあふれた、一種の時事評論的な作品群である。憲宗の元和前期は、順宗の永貞の革新と並ぶ政治刷新の氣運が高潮した時期であった。折しも白居易は、「闕くる有らば必ず規し、違ふ有らば必ず諫む[38]」べき側近清要の諫官、左拾遺（門下省所屬、從八品上）の職に任ぜられ、毎月支給される二百枚の諫紙[39]を用いて誠實に諫言した。「新樂府五十首」の連作は、直接明言をはばかる時事問題を詠歌して天子のお耳に達することを願った一種の〝諫草〟であり、諫官としての強固な責任感に支えられていた。

○〔驪宮高〕　驪宮は、唐の都長安城の東郊約二五キロの地（陝西省臨潼縣城の南）にある驪山に置かれた離宮「華清宮[40]」を指す。秦漢以來の有名な溫泉保養地[41]（湯の溫度は四十三度、鹽化カリウムなどの鑛物質を含み、治病効果をもつ）である。天寶六載（七四七）、玄宗は楊貴妃の歡心を買うべく財力を盡くして溫泉宮の大增築を行い、新たに華清宮と命名した。そして保養（療疾・延命など）をかねて冬期の避寒地として利用する。『舊唐書』卷五一、玄宗楊貴妃傳[42]には、「玄宗は毎年十月、華清宮に幸す」という。「華清」の名は、この驪山湯に對して書かれた北周の王褒撰「溫湯銘」のなかの、「華清は老を駐め、飛流は心を瑩く」[43]にもとづくらしい。じつはこの「華清駐老」の語は、西晉の左思の名作「魏都の賦」（『文選』卷6）の「溫泉悠湧して自ら浪ち、華清　邪を蕩きて老い難し」を踏まえている[44]。唐の呂延濟は下句に對して、「其の華

美にして潔清なるは、以て疾病を蕩滌して壽を延ばすべきを言ふ」と注する。つまり、〝華しく輝き、清らかに澄みわたれる〟溫泉に對する讃嘆の念をこめて、華清宮と名づけたわけであろう。

「驪宮高し」の篇名は、通常の第一句（高高驪山上有宮）ではなく、むしろ第二十三句（驪宮高兮高入雲）[45]に由來しよう。しかもこの三字は、三年前の元和元年（八〇六）に成り、人々の間に親しまれていた作者自身の「長恨歌」中の一句、「驪宮高處入青雲」を念頭に置いた命名らしい（陳寅恪など）。同じ元和元年の白詩（「權攝昭應、早秋書情、…」卷9）にも、類似した表現「驪山　宮殿高し」がある。[46]

○〔主題〕本詩の表現意圖を明示する小序に、「天子の、人の財力を重惜することを美むるなり」という。重惜は、甚だ大切にする意。鎌倉時代（一二五七年）に書寫された眞福寺藏『新樂府注』[47]卷下には、「（憲宗が）人ノ費ヲ知リ、國ノ煩ヒヲ痛マシメ給タル事ヲ讃テ候也」と解說する。

玄宗が財力を盡くした豪奢な華清宮も、安祿山の亂や魚朝恩の破壞などを經て、中唐期にはすっかり荒廢していた。[48]新たに修復しないかぎり、天子の滯在もかなわぬほど無殘な狀況であった。十一年後にあたる元和十五年（八二〇）十一月、卽位してまもない穆宗が、華清宮への遊幸を企てた。このとき、中書・門下兩省の供奉官たちは、一齊に多大な浪費と不吉な末路を危惧して強く反對した。元稹の「兩省供奉官諫駕幸溫湯狀」[49]（『元稹集』卷34）にいう――玄宗の泰平時の遊幸でさえ、「物議喧囂して、財力耗頽し」、ほどなく安祿山の亂が勃發した。かくて以後の天子は、「深く覆轍（失敗した先例）に懲り、驪宮は圮毀し、永く修營を絕つ。官曹は盡く田萊に復り、殿宇は半ば巖谷に堙もる」、と。こうした認識は、十一年前もほぼ同樣であったに違いない。財力逼迫の折、華清宮の再建は不可能であり、周の幽王や唐の玄宗のごとき悲慘な最期さえも豫感[50]される愚行、と思えたことであろう。陳寅恪は『元白詩箋證稿』第五章で、こういう（要旨）、「當時、天子に寵愛されていた〝小人〟のなかに、驪宮への遊幸を勸めて憲宗の歡心を買おうとする者がいた。それで諷諭したのだ」と。

○〔遲遲兮春日〕遲遲は、「日ノウラゝカニ永キ貞」（『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』）をいう重言（疊字）。この句は周知のごとく、『詩經』豳風「七月」の「春日遲遲たり」を踏まえている。陳鴻の「長恨歌傳」（『文苑英華』卷七九四所收の『麗情集』本）にも、「春日遲遲兮恨深、冬夜長長兮怨急」とあ

る。ちなみに、『毛詩正義』巻八にいう、「遲遲とは日長くして暄きの意、……人、春の暄きに遇へば、則ち四體舒泰し、春には晝景の稍く長ずるを覺え、日行むこと遲緩なるを謂ふ。故に遲遲を以て之を言ふ」と。

○〔兮〕『楚辭』に頻用される、リズムを整える語氣詞。『唐宋詩醇』巻二十の評語に、「格調は騷に摹り、詞氣は特に婉約たり」とある。本條の四句は、『楚辭』のなかでも「九歌」の句式—各句の中間に兮を置く—を用いた、美しい隔句對である。九歌式の兮字は、「節調助字であると共に、而・於・以・之などの助詞の働きをする」（星川清孝『楚辭』[51]十頁）ともいう。この觀點に立てば、上句の兮は形容詞の後につく接尾辭（「～然」の類）、下句のそれは順接を表す連詞（接續詞、而の類）に近い用法である（後半二句も同樣）。徐仁甫『廣釋詞』巻四、兮の條參照。

○〔玉甃〕玉は美稱。甃は本來「井壁」（『説文』巻12下）を意味するが、ここでは浴池の壁面のタイルの類をいう。白居易は別の詩（「題廬山山下湯泉」巻16）の中でも、「驪山の溫水は何事に因り、流れて金鋪・玉甃の中に入るや」と歌う。より古くは、初唐の徐彦伯「奉和幸新豐溫泉宮應制」詩に、「青壇環玉甃、紅礎鑠金光」と見える言葉である（柿村『考證』）。北宋初めに成る張洎撰『賈氏談錄』には、「第一所は是れ御湯、周環數丈、悉く砌むに白石を以てし、瑩澈なること玉の如し」という。しかし、近年の發掘調査[52]によれば、湯池の底や壁面の「玉甃」は、つややかな方形の「青石板[53]」（厚さ15～30センチ）であった。玄宗の蓮花湯（御湯九龍殿）は、蓮の花をかたどった上下二層の臺式（東西約十・六メートル、南北約六メートルの大きさ）である。楊貴妃の入浴した芙蓉湯（海棠湯）は、その西北に位置し、海棠の花をかたどった二層臺式の凝った造り、という[54]。

○〔暖〕『六注』に「春ノ日ナレハ也」とある。

○〔溫泉溢〕溫泉の和訓は「イテユ[55]」。『初學記』巻七、驪山湯の條に引く後漢の張衡撰「溫泉賦[56]」に、「余適驪山、觀溫泉、浴神井、…」とあり、北齊の劉逖「浴溫湯泉」詩にも、この驪山湯を「神井堪消疹、溫泉足蕩邪」と歌う。白居易はすでに「長恨歌」中に「溫泉水滑洗凝脂」と詠む。ちなみに、溫泉と宮樹との對は、皇甫曾「晚至華陰」詩の「溫泉看漸近、宮樹晚沈沈」、張籍「華清宮」詩の「溫泉流入漢離宮、宮樹行行浴殿空」などにも見られる。溢は「滿ル義」（『六注』）、「しきりの外へ中にもつたる物のこぼれ出ること」（皆川淇園『虛字解』）。

○〔嫋嫋兮秋風〕　本條の四句は、『楚辭』九歌「湘夫人」の「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」の句式を意識的に踏襲するとともに、この五字は上句をそのまま用いたもの。嫋嫋は「アキカセノ、シナヤカニフク貞」（『抄注』）、「長ク弱キ貞」（『白氏長慶集諺解』[57]）をいう重言。白居易は、涼風や秋風などの形容に愛用する（二十一例）。「嫋嫋秋風多、槐花半成實」（「秋日」巻9）はその一例。

○〔山蟬〕　初唐の沈佺期「遊少林寺」詩に、「歸路烟霞晚、山蟬處處吟」とある。

○〔宮樹紅〕　華清宮の樹々の紅葉を歌う白詩には、「紅葉紛紛蓋欹瓦、綠苔重重封壞垣」（「江南遇天寶樂叟」巻12）、「莫問華清今日事、滿山紅葉鎖宮門」（「梨園弟子」巻19）などもある。[58]

〔注〕

(1)　召還の詔勅が下ったのは、元和九年の末らしい。薛鳳生『元微之年譜』や花房・前川『元稹研究』「年譜」参照。

(2)　ただし元和九年の冬には、山南東道節度使嚴綬につき従って唐州（河南省泌陽縣）にいた。従って當時、元稹はすでに節度使の従事（幕僚）に改められていたらしい。卞『元稹年譜』など参照。

(3)　圓仁『入唐求法巡禮行記』巻一、開成三年七月廿四日の條に、館を「此是侍供往還官客之人處」と説明する。

(4)　大庭脩「吐魯番出土　北館文書—中國驛傳制度史上の一資料」（『西域文化研究』第二、法藏館、一九五九年所収）参照。

(5)　白居易「得微之到官後書、備知通州之事…」四首其四（巻15）。ここの解説は、主にこの白詩四首を踏まえる。通州の風土については、元稹の「叙詩寄樂天書」（巻30）にも詳しい。

(6)　「酬樂天得微之詩、知通州事、因成四首」其二（巻21）。

(7)　王拾遺『元稹傳』一二六頁に、「病中、元稹心情落寞、常常是夜里欲睡不能、只有靜坐、苦思冥想、最不放心的就是几个孩子、究竟成了什么样子？」という。

(8)　『隋書』巻四、煬帝紀、大業十二年の條にも、「上於景華宮徵求螢火、得數斛、夜出遊山、放之、光徧巖谷」とある。

(9)　伊藤東涯『名物六帖』天文箋には、「オヤニナホシ」とする。

(10)　『左傳』昭公三年の條の「火中、寒暑乃退」に對する杜預注に、「心以季夏（六月）昏中而暑退、季冬（十二月）旦中而寒退」とある。

(11)　程俊英・蔣見元『詩經注析』（中華書局、一九九一年）など参照。

(12)　弘文堂、一九二八年。

(13) ただし、古典のなかで大火が黄昏時に南中する季節の記述には、舊暦五月と六月の二種がある。『尚書』堯典や『夏小正』は前者であり、『左傳』昭公三年の杜預注や『禮記』月令篇は後者である。この異同は、いわゆる歳差にもとづくのであろう。郝懿行『爾雅郭注義疏』中之四、釋天の條など參照。

(14) 飯島忠夫『支那暦法起原考』(岡書院、一九三〇年)第三章(八四頁)にも、「大火は參(オリオン)が隱れるところの三月の初昏に始めて東方に現れ、五月の初昏に南中し、七月の初昏に西方に現れ、八月の初昏に隱れてしまふ」という。

(15) 『爾雅』釋天に、「大辰、房・心・尾也」とある。

(16) 同朋舎、一九八九年。

(17) 月・太陽及び惑星の引力の影響で、地球自轉軸の方向が變り、春分點が恒星に對し、毎年五〇秒ずつ西方へ移動する現象(『廣辭苑』第三版)。

(18) 南京師範學院地理系江蘇地理研究室編『江蘇城市歴史地理』(江蘇科學技術出版社、一九八二年)所收。

(19) 三秦出版社、一九八七年。

(20) 上海古籍出版社、一九九三年。

(21) 傅璇琮『李德裕年譜』(齊魯書社、一九八四年)大和七〜八年の條や、瞿蛻園『劉禹錫集箋證』外集卷八「寄毗陵楊給事三首」の條など參照。

(22) 郁賢皓『唐刺史考』四、常州の條(一六五七頁)參照。

(23) 高志忠『劉禹錫詩文系年』(廣西人民出版社、一九八八年)など參照。

(24) 唐邦治「唐郢州刺史許渾傳」(『鎮・丹・金・溧・揚・聯合月刊』第二期、一九四六年)に、進士科及第後のことを、「既南旋、無諸侯辟聘、恣意遊蘇・常・杭・越」という。

(25) 拙稿一七七番參照。

(26) 『新唐書』卷一七五、楊虞卿傳。

(27) 『舊唐書』卷一七六、楊虞卿傳。

(28) 董乃斌「唐詩人許渾生平考索」(『文史』二六輯、一九八六年)によれば、許渾の「南亭偶題」や「與群公宴南亭」詩は、靖恭坊の楊家(拙稿一六八番參照)での酒宴の折に、「楊氏兄弟に望む所(自己の推擧を得る目的)有りて作った」作品であり、南亭とは楊虞卿宅のそれを指すとするが、確證に乏しい。しかし、許渾が大和年間の初め、楊家の人々(虞卿・汝士ら)と知りあった可能性は高い。

(29) 同『唐詩人行年考(續編)』所收。

(30) 許渾には「留別趙端公」「瓜洲留別李詡」などがある。

(31) つまり、この與は、「莫使香風飄、留與紅芳待」(李白「寄送十二首」其三)や、「香輪莫輾青青破 留與愁人一醉眠」(鄭谷「曲江春草」)などの用例(動詞の後に輕く添えた助字)とは異なる。

(32) ほかの詩人の用例をあげれば、趙嘏の「楊柳風多潮未落、

蒹葭霜冷雁初飛」（「長安月夜與友人話故山」）や、李嘉祐の「楚地蒹葭連海迥、隋朝楊柳映堤稀」（「送皇甫冉往安宜」）などがある。

（33）『初學記』巻三、秋の條に引く梁元帝『纂要』など參照。

（34）小島憲之『古今集以前』（塙書房、一九七六年）七五頁參照。唐詩の用例としては、杜甫「湖中送敬十使君適廣陵」詩の「秋晚嶽增翠、風高湖湧波」、柳宗元「田家三首」其三の「風高榆柳疎、霜重梨棗熟」、周賀「送僧還南嶽」詩の「風高寒葉落、雨絶夜堂清」などがある。

（35）袁剛「唐代的翰林學士」（『文史』三三輯、一九九〇年）に詳しい。

（36）陳寅恪『元白詩箋證稿』第五章にいう、「恐五十首詩、亦非悉在元和四年所作。……　或者此新樂府雖創作於元和四年、至於七年猶有改定之處」と。

（37）弘文堂、一九二六年。

（38）白居易「初授拾遺獻書」（巻58）。

（39）白居易「醉後走筆…」詩（巻12）參照。

（40）拙著『唐詩の風土』「華清池」の條や、松浦・植木『長安・洛陽物語』「華清宮と香積寺」の條など參照。

（41）驪山湯に關する詳細な專著としては、張自修編著『麗山古迹名勝志』（麗山旅游讀物編委會、一九八五年）がある。

（42）玄宗の華清宮行幸の年月については、注（41）書の「唐代帝王遊幸麗山華清宮概況」（二〇一頁以下）參照。

（43）注（41）書は、北魏の元萇「溫泉頌碑」の「淵華、玉澈、心清、萬仞」に、より早い起源を見いだす。

（44）『玉海』巻一五八、唐溫泉宮・華清宮の條參照。

（45）平岡・今井校定『白氏文集』には「兮」を衍字と見なす。

（46）「驪宮」の語自體は、同じ新樂府五十首中の「新豐折臂翁」詩のなかにも、「唯聽驪宮歌吹中」（神田本などの舊鈔本）とある。宋版等は「梨園」に誤る。

（47）『斯道文庫論集』七輯（一九六八年）に收める太田次男の翻印に據る。

（48）竹村則行「中晚唐における華清宮の零落」（九大文學部『文學研究』八七輯、一九九〇年）參照。

（49）卞『元稹年譜』三二六頁以下や、注（48）の竹村論文參照。

（50）『資治通鑑』巻二四三、敬宗寶曆元年（八二五）の條に、敬宗の華清宮行幸を諫止しようとした張權輿の言葉に、「昔周幽王幸驪山、爲犬戎所殺。秦始皇葬驪山、國亡。玄宗宮驪山而祿山亂。先帝（穆宗）幸驪山、享年不長」とある。

（51）明治書院・新釈漢文大系。

（52）唐華清宮考古隊「唐華清宮湯池遺址第一期發掘簡報」（『文物』一九九〇年五期）、同「唐華清宮湯池遺址第二期發掘簡報」（『文物』一九九一年九期）參照。後者の圖版は參考になる。

（53）「青石は藍田の山より出づ」で始まる白居易「青石」詩（新

樂府五十首の一）が思い起こされる。

(54) 陝西省博物館編『隋唐文化』（學林出版社、一九九〇年）五〇・五一頁の「蓮花湯遺址」「貴妃湯遺址」のカラー寫眞參照。

(55) 大東急記念文庫所藏江戸初期補寫本（勉誠社影印『金澤文庫本　白氏文集㈠』）など。

(56) 『白氏六帖事類集』卷二、溫湯五十一の條にも引く。

(57) 森孝太郎・尾崎知光編、和泉書院、一九八六年。

(58) 前掲の白詩「權攝昭應、早秋書事、…」に唱和した元稹の「酬樂天」詩にも、「崔嵬驪山頂、宮樹遙參差」とある（元和元年の作）。

〔補注〕

徐俊「試論〝許渾千首濕〟」（『文學遺產』一九八九年一期）にいう、詩想の狹さと變化のなさ、用事（典故）や造句の類似・重複が、「千首濕ふ」要因の一つであり、「水」字を含む對句中では、ほぼ半分は「山」と「水」が對し、他の半分は「水」と「雲」、「水」と「風」、「秋水」と「夕陽」などが對する。對偶は精密ではあるが、きわめて變化に乏しい、と。また歸依した禪宗（南宗）の影響を指摘する羅時進の說〔拙稿の補訂㈥の注（40）參照〕に對しては、確固たる論據に乏しいと批判し、傳統的な水の豐かなイメージを借りて心中の憂悶をはらうのだと指摘する。